

昭和 11 年から平成 23 年にかけて制作された
日本映画の中から、映画史を代表する作品をご覧ください！

優秀映画鑑賞推進事業



35mm

フィルム 映写機

による

特別上映会

劇場で上質な映画を見よう

2024
プログラム

11月1日(金)

監督 成瀬巳喜男 2作品上映

10:00 「めし」

14:00 「浮雲」

11月2日(土)

監督 木下恵介 2作品上映

10:00 「二十四の瞳」

14:00 「野菊の如き君なりき」

開場は開映の 30 分前

主 催 一般財団法人松本市芸術文化振興財団 / 国立映画アーカイブ
特別協力 文化庁 / 一般社団法人日本映画製作者連盟 / 全国興行生活衛生同業組合連合会 / 株式会社 KADOKAWA
後 援 松本市 松本市教育委員会





めし

[1951年 東宝]

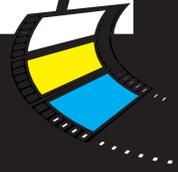
11/1 (金)
開映 10:00

黒澤、溝口、小津に続く日本の四番目の巨匠として、世界中の映画批評家から熱い視線を受ける成瀬巳喜男監督の代表作。結婚生活も5年が過ぎ、倦怠期を迎え始めた夫婦。そこに突然、夫の姪が転がり込んできたことから、単調だった二人の暮らしに思いもよらぬ波乱が生じ始める。美男美女の主演二人が、本作ではともに中年にさしかかり、平凡で退屈な男と所帯やつれた女になったさまを、見事に好演している。原作は林芙美子による未完の新聞連載小説。「キネマ旬報」ベストテン第2位。

(白黒 / スタンダード / モノラル / 97分)

1日目
上映作品

2日間で4作品
35mm
フィルム映画上映を
お楽しみください



浮雲

[1955年 東宝]

11/1 (金)
開映 14:00

林文学の最晩年の長篇小説を映画化したものであり、戦時中、勤務先の仏印で激しい恋に陥った一組の男女が、戦後の荒廃した日本でその不倫関係断ち切れない様子を描いたものである。あきらめても裏切られても離れられない二人のやるせなさ、なにかにすがりつかずには生きていけない人間の業の深さを描いた成瀬の代表作といえよう。微妙な心の揺れを表現した高峰秀子と森雅之の演技は敬服すべきものがあり、小津安二郎をして「オレにできないシヤシヤは溝口の『祇園の姉妹』と成瀬の『浮雲』だ」と言わしめた。「キネマ旬報」ベストテン第1位。

(白黒 / スタンダード / モノラル / 123分)

11/2 (土)
開映 10:00

二十四の瞳

[1954年 松竹 (大船)]

壺井栄が1952年に発表した児童小説を、当時気鋭の中堅監督であった木下恵介が脚色・監督した作品。

小豆島の豊かな自然を背景に、戦争をはさんだ激動の時代を、小学校の教師とその教え子たちの成長を通して描き、国民的大ヒットとなった感動大作である。小学唱歌のみを用いた音楽も特徴的である。冒頭の場面と同じく再び自転車で、岬の分教場に向かう主人公、大石先生を小さく映し出すラストシーンには、毫も変わらぬ自然、その中を点景のごとく生きていく人間、そして人間の営みに対する木下の思想が集約されている。「キネマ旬報」第1位をはじめ、この年の映画賞を独占した。

(白黒 / スタンダード / モノラル / 155分)

2日目
上映作品



11/2 (土)
開映 14:00

野菊の如き君なりき

[1955年 松竹 (大船)]

原作は、明治の歌壇で正岡子規に師事した著名な歌人、伊藤左千夫の小説「野菊の墓」。数十年ぶりに故郷を訪れた老人の追憶が、信州の美しい自然を背景に回想形式で描かれる。旧家に育った少年と、2歳年上のいとこの少女との淡い恋愛が、古い道德観に縛られる大人たちによってとがめられ、二人は離ればなれにされてしまう…。

主人公に起用された有田紀子と田中晋二は無名の新人で、演出意図に沿った初々しさを充分に発揮している。キネマ旬報「ベストテン」第3位。

(白黒 / スタンダード / モノラル / 92分)



【チケット料金】
500円 (1作品)
全席指定・税込

【会場・お問合せ】
松本市波田文化センター
TEL: 0263-92-7501
FAX: 0263-92-7505
長野県松本市波田 10106-1



【チケット取り扱い】 (9時~17時/月曜休)
【電話】 0263-92-7501
【窓口】 松本市波田文化センター1階

長野道松本ICからR158を上高地方面へ8Km (駐車場あり) JR松本駅から松本電鉄上高地線で波田駅下車 (25分、徒歩10分)